

【表題】

学習意欲が高まるしくみを学校教育に組みこむことについて —— 〈うらやんで育つ〉から〈育って育つ〉への転換を ——

【要旨】

学校教育最大の問題は、生徒の学習意欲が低いことです。ここでは、学習意欲を内発的によび起こしてこの問題を解決する方策を具体的に述べ、それを学校教育にとり入れるために、

- ・「高等学校学習指導要領案」第1章第5款5の一部を修正すること
- ・教科書にひと工夫を加えること

の二つを提案します。

【本文】

(1) 学習意欲の低さに関する事実の確認

日本の学校教育の現状を他国と比べつつ展望するとき、最大の問題として浮かび上がるのは、学習意欲の低さです。具体的には、次の二つの事実です。

事実A 教科横断的に(理科も、算数・数学も、他の教科も)学習意欲が低い。

事実B 小学→中学→高校と年齢が上がるにつれて、学習意欲が下がっていく。

(2) 根本原因のありか

事実A(教科横断的に学習意欲が低い)は、「学習意欲の低さの根本原因は、個々の教科の枠内にはなく、それを越えたところ、すなわち個々の教科の学習がその上に成り立つ基盤にある」ことを示していると解せます。従って、個々の教科の枠内で対策をうつ(例えば、理科の枠内で、自然体験や観察・実験の時間をふやす)だけでは解決にならず、効果はほとんど期待できません。まず、個々の教科の枠を越えた根本的な対策がなければならぬのです。

学習意欲が低いことの根本原因は何か。それを示唆するのが事実B(年齢が上がるにつれて学習意欲が下がっていく)です。この事実は、「本人に自意識が生まれ、自意識の影響力が増大するにつれて、勉強する気がしなくなっていく」と読みかえることができます。

(3) 〈うらやんで育つ〉成長——学習意欲の外発喚起——の終わり

かつて日本社会では自国を「後進国」と自覚する通念が支配的でした。その中で自意識が芽生えると、「先進国に追いつき追い越そう」「自分よりもすぐれたあんな人に自分もなろう」という意欲が自然にわき出し、それが学習意欲を下から支えていました。自

意識の発達につれて、自分(ないし自国)の外に目標がありありと思われられるようになり、外部から引かれる形で学習意欲ないし進歩意欲がわき出していたのです。成長意欲が外発的に喚起され、「うらやむ」という言葉を最も前向きの意味に使う、〈うらやんで育つ〉成長がいたるところで起こっていました。

しかし、日本社会は変わり、自国を「先進国」と自覚する通念が支配的となった現在、〈うらやんで育つ〉成長は影をひそめました。目指すべき目標が外部になく、その影響が、本人の年齢が上がり自意識が発達するにつれてしだいに強く現れるようになって、学習意欲をおし下げていきます。これが事実B(年齢が上がるにつれて学習意欲が下がっていく)の根本原因であり、事実Bは今や時代の主流です。

(4) 〈育って育つ〉成長——学習意欲の内発喚起——への転換

このような日本社会の現状にあって、いま必要かつ有効な根本対策は、学習意欲・成長意欲を外発喚起から内発喚起に切りかえることです。具体的にどうするか。

肉体の成長は背が高くなるなどの形で目に見えますし、運動能力の成長は記録がのびるなどの形ではっきりわかります。しかし、学習のように精神的な能力に関しては、自分が成長したことを知るのは容易ではありません。そこで、次のような方法で、自分が成長したことを本人にはっきり自覚させます。

理科や算数・数学のような教科の学習に引きつけて述べると、「遺伝」「イオン」「標本調査」などの学習のひとまとまり(=単元)が完了するごとに、

(a) その単元の学習をする前の自分はどうかであったか

(b) その単元の学習を終えた今の自分はどうかであるか

を自由記述ないし問いかけに答える形で生徒に確認させます。この二つは静的な事実です。これをふまえて、次に、(a)と(b)を比べさせ、

(c) その単元の学習によって自分はどうか変わったか

を自由記述ないし問いかけに答える形で考えさせます。ここで出てくる答えは時間軸の入った動的な事実の発見であり、その単元を学習したおかげで自分が進歩・成長したことが、具体的な内容をともなってはっきり自覚されます。そして、発見・自覚の瞬間、深いよろこびがわき出します。成長したよろこびです。そのよろこびを大いに味わいます。十二分に味わったところで、

(d) 次は何をしたいか

を自由記述させます。成長のよろこびを味わうと、不思議ですが、次の成長課題が自然に出てきます。こうして、学習意欲・成長意欲が内発的に喚起されます。

成長したよろこびを味わい、そのよろこびを原動力にしてさらに次の成長をする……。これを繰り返して螺旋を描きながら上昇していく成長のサイクル、一言でいえば〈育って育つ〉成長が生じます。このような意欲の内発喚起による成長がいたるところで起こ

るようにすることで、日本社会は若さと活力を回復し、再び成長回路に乗ることができま
す。

(5) 〈育て育つ〉成長を根本にすえた、二段構えの学習意欲向上策

〈育て育つ〉成長は、学校教育の中にどのように組みこむのがいいのでしょうか。

それぞれの教科で、学習のひとまとまり(=単元)が完了するごと(ほぼ一か月ごと)に上記(a)~(d)を行うようにします。最も確実なのは、教科書の単元ごとに1ページを割り、その単元に合った内容に具体化して(a)~(d)を問いかけることでしょう。そうすれば、単元ごとに自分の成長をよろこぶことができ、次の単元を学ぶ意欲がわいてきます。これが教科横断的で根本的な、第一段目の対策であり、必須事項です。

この基盤の上に、さらに第二段目の対策として、個々の教科の枠内で、例えば理科なら、自然体験や観察・実験の時間をふやしたり、科学と日常生活や社会とのかかわりを強調したりします。すると、教科の学習内容そのものによっても、学習意欲が喚起されます。

学習意欲の向上には、このような二段構えの対策が最上であると考えます。

(6) 学習指導要領案の修正および教科書の企画に関する提案

上記二段構えの第一段目(教科横断的な対策)を確実に実施するために、学習指導要領にその方向性を明示的に書きこむことを提案します。例えば、第1章第5款5「教育課程の実施等に当たって配慮すべき事項」の(5)を、次のように修正してはどうでしょう。

各教科・科目等の指導に当たっては、生徒が見通しを立てたり学習したことを振り返って自らの成長を確認したりする活動を学習のひとまとまり(おおむね一か月)ごとにとり入れ、学習意欲の向上を図ること。

または、第1章第5款5の(12)の評価に関する記述に、「学習のひとまとまり(おおむね一か月)ごとに自己評価を行わせ、生徒に成長を自覚させて、学習意欲の向上に生かす」旨を書き加えてはどうでしょう。

さらに、学習指導要領のこのように修正した記述を根拠のひとつとして、教科書に〈育て育つ〉成長をうながす工夫を入れることを提案します。具体的な入れ方は、例えば前述の通りです。教科書が変わることで、学習指導要領に書かれた新しいことがはじめて実効性をもつようになり、生徒の学習意欲が向上に転じるとともに、長い目で見れば日本社会が若々しい活力をとりもどしていくことでしょう。